

【自著紹介】

『“E.クリストウ著 SOULの論理” 解題と訳』

樋口 貞三*

1. まず自分のこと

どうしてもこういう出だしになることをお許し願いたい。恐らくこの印刷物について一般的な書評形式によってそのまま紹介したとしても空文紹介に近いものとなりかねない予想を抱くためである。言い方を替えるならば、さらに大胆にいうならばこの印刷物が出現するのは著者の私と“一体物”と言えなくもないものである。

もう三十年近く前になると思うが、「身体の飢餓と魂の飢餓」という課題表明を行いながら過ごして今日に至っている。しかし、と同時に私は自分自身の学問領域については紛れもなく社会科学の一端に所在するものの一人であると考えている。長年、食に関わる経済学、当初は農業経済学、そしてやがて食料経済学、そして食品経済学、異常態フードシステム論などと“渡り歩き”(?)、講義としてはさらに「食文化論」などを担当しそこそこの研究者界の一員として過ごしてきたが、そのものが「魂、soul」について語る、とは？この領域での「soulあるいは魂」という用語への違和感があって当然と考えるし、それをやみくもに否定することはできない。とりあえず、この点に関し、こうした否定的環境にたいする若干の緩和剤と思う流れについて紹介することを許されたい。

本著作内の文献紹介で詳説しているなかから二冊を抽出して以上の趣旨に適う説明を簡潔に記す。

1 安富 歩著 『合理的な神秘主義：生きるための思想史』

叢書 魂の脱植民地化3 青灯社 2013 本書162頁～

2 レオン・R.カス著 工藤・小澤訳『飢える魂』

りぶらりあ選書 法政大学出版会 2002年

いわゆる「科学」と称すものに「soul魂」がどのように組み込まなければならないか、という極めて一般性の乏しい問題にからむ。それぞれ権威ある大学の教授をつとめ、一人は経済学者そして他の一人は生物学者である。そして強調しなければならないこととして

*元日本大学生物資源科学部教授（ひぐち ていぞう）

両者が「魂」あるいは「soul」を表現道具としてではなく、それ自体を正面から取り上げ、“科学”におけるその意義、役割について述べている。詳細は割愛するが、安富は政治・思想史上の戦前植民地問題にからむある現地学者の書き物から、肉体（身体）、精神（心）、というよく馴染んでいる言葉とその対象だけでは足りない「魂の次元」と考えることになった問題に遭遇。

一方、レオン・カスは生物学のほか広範な人文諸科学の薫陶によって得たものから人間の“雑食性”視点より、いわゆる「飢えが求めているものは只のエネルギー源にとどまらない」、つまり“魂の飢え”状態にある世界状況について深く考察する。

2. 拙著の基本狙い

以上に述べたような個人史を伴いながら、社会科学と「soul魂」そして「食」との有機的な一体化を図ってきたが、その終着点で改めて、「soul魂」に直接切り込んだ若き天才の著作を取り上げ、“あいまいさ”が付きまとう「soul魂」についての彼の探索場面を紹介しようとする。改めて拙著の目的について述べる。「soul」あるいは「魂」という誤解を招きやすい言葉を“食”というもうひとつのキーワードとのからみで、これらを“学術レベル”への昇華を狙いとする作業の一環である。“学術レベルへの昇華”をもう少し具体的に表現してみたい。そのためには閃きに満ちている学術者（研究者）の著作を内外にわたって発掘する作業をおこなう必要があった。実は従来表現される「soul魂」については、ここで詳細に述べるスペースは赦されていないためごくおおざっぱに整理すると、その表現は多くの場合、誤解を恐れずに言えば“観念論的”な場合が多いのである。

なお、本書第Ⅵ章「とりわけ注目した書籍について」は私がこれまで渉猟した文献領域から選りすぐった70冊ほどの著作をかなり詳細に記述している。

3. E.クリストウ “The Logos of the Soul”

本書に出会ったのは丁度10年前ほどであった。心に沁みる、そして説得力あるsoulの論書をあれこれ捜し歩いているさい、この著作の書評を偶然に読む機会を得、本書の冒頭に書かれてある言葉、ユング派心理学の巨頭あのJ.ヒルマンをして“真の意味でソクラテスの後継者である”と言わせた天才を読み通す決心ができた。33歳の若さで天に去っていった彼について次のようにいう、「第一原理を関わるものの運命であった」。その難解な内容と格闘しながら、10年を経てやっと解題と訳が完成した。なお、拙著および本稿では、通常の「訳と解題」という流れが、「解題・訳」となっている。通常のように、訳を先行させ、その解説などを行うという手順を意識的変更した理由である。

クリストウの『soulの論理』はこのように難解である。世に、さまざまな「soul魂」観が存在しているなかで、クリストウのそれは只一点、その中心は「心理学的経験 psychological experience」であるとする。クリストウは人間の認識主体として「身体 (body)」、「心 (mind)」とともにsoulの認識のために辛苦し、論理を重ねるなかでこの psychological experienceに到達した。その真髄に達するためには下手な説明は害毒となる。直接、クリストウの本文を見よう。「身体 (body) と心 (mind) を一体化した論理が構築可能な実態 (reality) はsoulの場合だけである。我々が「体外」を認識可能なのは、`body、に由来する知覚 (perception)、あるいは `mind、に由来する概念作用 (conception, mentation) によるが、soulはこれらによっては把握できない。」「かくして唯一の言語、われわれの目的に叶うことができそうなもの、それは `経験 (体験)、という言葉である」。しかし「経験」ではあまりにも広領域であり、一般的なのでpsychologicalという形容詞を付与し、psychological experience 心理学的経験、と名付けるのである。つまり、「経験、事実、あるいはそれらと等価の用語は、知覚 (perception)、あるいは思考 (mentation)、という言葉が重宝され、その系統的登用の害を被ったことから、こうした混乱を避けるために、物質的 (physical) あるいは思考的 (mental) 事実から明瞭に区別された心理学的事実の序列性を守るための `心理学的、という形容詞を適任とするのである。」「soulは思考、知覚するのではなく、経験する主体である。」

このsoulについて“経験”という視角を設定した先人は皆無ではないが、クリストウは「論理」を構築したという意味で特筆される。

4. 残された課題

日頃の生活上の生き方標準として私はカトリックにそれを求め、それに従っている。そしてカトリックにも当然、「soul、魂」の“定義”がある。しかし、『Catechism of The Catholic Church』(カトリック教会のカテキズム)という教会の“法典”ではsoulの扱いは簡単ではない。そしてその訳も複雑化する。こうした状況下では、そこでの「soul、魂」と心理学的経験としてのsoulとは一見してほとんど接点が無いように見えるのである。今はまだ薄暗い様相ではあるが、信仰における「soul、魂」とクリストウのそれとのある種の整合性のあり方を困難な課題であるが今後考えていきたい。先は決して暗くはない。

5. 主なる関連文献

〔1〕安富 歩 (2013)『合理的な神秘主義：生きるための思想史』青灯社

〔2〕カス、レオンR. (2002)『飢えたる魂』法政大学出版会 p.320-321

- 〔3〕 樋口貞三 (1998)『身体の飢餓と魂の飢餓』筑波書房
- 〔4〕 樋口貞三 (2000)「現代的飢饉・飢餓成因の類型化にかかわる中国ケースの意義」
食品経済研究 第28号、pp.89-108
- 〔5〕 樋口貞三 (1999)「現代飢餓論の序説的展開」食品経済研究 第27号、pp.53-76
- 〔6〕 樋口貞三 (2006)「『飽食』と『食不安』の原画として」：食料問題からみた
昭和30年代』『食の科学』, pp.4-10
- 〔7〕 樋口貞三 (2014)「異常態フードシステム論：その構造・成立過程・意義」
食品経済研究 第42号 (2014)
- 〔8〕 樋口貞三 (2006)「『魂』の教育のためにいま必要なこと：『食』を通して魂と
教育を考える」カトリック教育研究 23号pp.16-31
- 〔9〕 樋口貞三 (2021)「食問題にかかわる人々のための魂論：
主に“身体の飢餓と魂の飢餓”命題をめぐって」食品経済研究49号

〔請赦〕431頁の本書は当初予定よりもはるかに超過したため、本来の出版元から出版・販売不能という見通しの連絡を受け、やむを得ず当座は限定非売品とし、後日、縮刷版を出版することになった。

〔盛岡市橋本印刷 2023年4月 非売品〕

〔謝辞〕本稿のような極めて特異な記事を寛大にも掲載可能にしてくださった清水みゆき編集委員長と編集員会に感謝申し上げます。